

「Nを通じて」と「Nを通して」についての一考察¹

—BCCWJを資料としたコーパス分析—

趙 海 城

1 はじめに

以下の例は泉原（2007：362）より引用したものである。a文では、「通して」が自然で、b文では「通じて」が自然であり、両者は置き換え不能とされている。

- a. 私たちは、居ながらにして、世界中の情報を、インターネットを+通して／×通じて、手に入れることができる。
 - b. ハッカーたちは、ウイルスに感染されたファイルが送りこめるインターネットを+通じて／×通して、ユーザーのシステムを破壊していく。
 - a. 大自然のもとの、汗を流しながら、一緒に働いた経験を+通して／×通じて、ふたりは生涯かわらぬ友愛をもちつづけた。
 - b. 戦場で、血みどろになりながら、一緒に戦った経験を+通じて／×通して、ふたりは生涯かわらぬ友愛をもちつづけた。
- a、b文の違いについて、泉原（2007：363）は以下のように分析している。

A +を通して+ B：A を+媒介／手段+として、単純明快／公明正大+に B が行われる場合に使われる
A +を通じて+ B：媒介／手段+とした A が、公にできない秘密のものであったり、不正なものであったりする場合に使われる

後者「A +を通じて+ B」は「内緒／内輪／内密／秘密裏／裏やコネを使った／おっぴらにできない／隠しておきたい」という話し手の気分が反映される場合に多用される。逆に言えば、前者の「A +を通して+ B」で「後ろ暗い／やましい+ところはない」といった気持ちを表すことができる。

¹ 本稿は、2014年2月「第5回コーパス日本語学ワークショップ（東京・国立国語研究所）」にてポスター発表した内容を基に、加筆・修正したものである。

また、「時間的地理的一貫性」を示す以下の用例における両者の違いについて、泉原（2007：363）では「ほとんど話し手の好みの問題になり、固有日本語、つまり訓読みの和語が好きな人は、前者「～を通して」を使い、音読みの漢字語が好きな人は、後者を使うといった傾向があるだけのように思われる」と述べている。

- ・このあたりは、一年／四季＋を＋通して／通じて＋花が咲き乱れる。
- ・この種の松林は、日本全国＋を＋通して／通じて＋見ることができる。

果たして、「を通して」「を通じて」が使われる文には上記のような話し手の気分の違いがそれぞれ反映されているのか、また「時間的地理的一貫性」（泉原用語）を示す用例において、「を通して」を使うか、それとも「を通じて」を使うかは話し手の好みによるものなのか。このような疑問を持って、本稿では、「Nを通じて」「Nを通して」を取り上げ、前接名詞Nの違いを中心に、両者の相違点を探りたい。

2 先行研究

泉原（2007）以外に、国広（1977）、森田・松木（1989）、グループ・ジャマシー（1998）、庵（他）（2001）、村田（1993）、花蘭（2004）のような研究が見られ、以下これらを概観しておく。

国広（1977）では、「を通して」「を通じて」を以下のように説明している（pp.122～130）。

◇他動詞の用法では特に「――をトオシテ（ツウジテ）」の形で、経路・媒体を示す一種の副詞句のような用法が固定しており、他の場合と少し違った意味の差が生じているようである。

- ・いちいちご挨拶できませんので、紙上をツウジテ／×トオシテお礼申し上げます。（紙上という媒体は伝達を成立させる不可欠の要素となっている）
- ・肉眼で見るには小さすぎるので、レンズをトオシテ／×ツウジテ見た。（肉眼で直接見ることもできるが、レンズを使った方がよく見えるということである。何かを通す方法は、通さない方法と並んでいて、選択の関係にあるということである）

- ◇トオシテは視覚に使えるが、ツウジテは使うことができない。
- ◇トオシテの経路は〈直接の経路に代わるもの〉であり、ツウジテの経路は〈不可欠のもの〉である。この相違はさらに経路が出来事に対して演ずる役割、係わりかたの深浅の差となって現れ、ツウジテの経路の方が係わりが深く、かつ内容が豊かであり、〈中略〉ツウジテは経路の役割あるいは通過中の事柄に特に注意が向けられているのが普通である。
 - ・受付をトオシテ申し込む。(直接に申し込まないで、正式に受付に行つて申し込む)
 - ・受付をツウジテ申し込む。(受付の手を経ない限りは申し込みは不可能という仕組みになっている。)

森田・松木 (1989) は、「格助詞の働きをするもの」の下位項目に「仕手・仲介・手段・根拠・原因を示す」を挙げている。その中で「を通して」「を通じて」²を取り上げて説明している (pp.20～21)。

- ◇人物や物事を仲立ちとして何かを行うことを表す表現で、「によって」より間接的である。“～を経由して”“～を手段として”の意を表す場合もある。
 - ・映画を通して都会生活に憧れたこの娘の素朴な夢は……
 - ・書物を通じて得た知識や情報を……
- ◇「を通して」「を通じて」はほぼ同意で相互の入れ換えが可能であるが、次例を見ると、「を通じて」の使用範囲のほうが多少狭いようである。
 - ・学生の生態を通して〈を通じて〉日本の教育を論じている。
- ◇連体格の用法としては、「を通しての」「を通じての」がある。
 - ・文通を通して〈を通じて〉の五年間の恋が実った。

また、「起点・終点・範囲を示す」項目の中で「を通じて」³を取り上げ、「にわたって」とともに記述している (pp.34～35)。

- ◇場所や期間がある範囲全体に及ぶことを表す表現である。
 - ・その基底を成す人間性とでも言うべきものは諸民族を通じてほぼ同一で

2 この他に「によって、により、によると、によれば、をもって、でもって、にして、につき」を取り上げている。

3 この他に「からして、をはじめ、に至るまで、にかけて、を通じて、にわたって」を取り上げている。

あるらしい事……

- ◇「を通じて」はさらにこの用法を一步前進させて、物事がある期間継続して行われることを表現する用法があるとしている。
- ・このようなことは人類の歴史を通じていつもの時代にも見られたことである。
- ◇「を通じて」の連体格は「を通じての」である。
- ・日本列島を通じての帰巢本能に駆られた民族大移動も……

グループ・ジャマシイ (1998) は、「を通して」「を通じて」を以下のよう

【をとおして】 (pp.315 ~ 316)

- ◇(1) Nをとおして〈仲立ち〉:人やものごと、動作を表す名詞などを受け、「それを仲立ちや手段にして」という表示を表す。それによって知識や経験などを得ることを述べるのに使う。
- ・実験を通して得られた結果しか信用できない。
- ◇(2) V-ることをとおして:動詞の辞書形を受けて、上の(1)と同様の意味を表す。和語の動詞を受けるのが普通で、「学習する」「研究する」のような漢語の動詞の場合は、(1)の表現を使って「学習／研究をとおして」のように言うほうが一般的である。
- ・子供は、学校で他の子供と一緒に遊んだり学んだりすることを通して、社会生活のルールを学んで行く。
- ◇(3) Nをとおして〈期間中〉:期間を表す語を受けて、「その期間中」「期間の範囲内」といった意味を表す。期間中ずっと継続的に行為が行われたり、期間内に断続的に生じる出来事などを表す。
- ・5日間を通しての会議で、様々な意見が交換された。
- ・この一週間を通して、外に出たのはたったの2度だけだ。

【をつうじて】 (pp.650 ~ 651)

- ◇NをつうじてV:「…を經由して」という意味。何かを經由して情報を伝えたり関係ができたかということなどを述べるときに使う。伝わるのは情報・話・連絡などで、交通手段は使えない。書き言葉的。「…をとおして」とも言う。

・その話は山田さんを通じて相手にもつたわっているはずです。

◇Nをつうじて：時間を表す名詞に付いて、「ある一定の期間とぎれることなくずっと」という意味を表す。書き言葉的。「…をとおして」とも言う。

・このあたりは四季をつうじて観光客のたえることがない。

庵（他）（2001）は、複合格助詞として「手段を表す表現」の中で、「によって、をもって」とともに、「を通じて」を取り上げている（pp.23～24）。

◇行為や情報伝達を媒介するものを表す。

・マネージャーを通じてその俳優の出演を依頼した。

◇変化の原因となる経験を表す用法もある。

・留学生との交流 {を通じて／によって} 彼は視野を多いに広げた。

◇節全体を手段とする場合もある。

・ボランティア活動に参加することを通じて多くのことを学んだ。

◇「を通じて」に似た形式として「を通して」がある。

・代理人を {○を通じて／○を通して} 球団に移籍を打診した。

また、「空間的・時間的範囲を表す形式」の中で、「にかけて、にわたって」とともに、「を通じて」を取り上げている（p.34）。

◇期間や区間を表す名詞について「～の間ずっと」という意味を表す。「を通して」もほぼ同じ意味で用いられる。

・熱帯地方では1年を通じて寒暖の差があまり大きくない。

・北陸自動車道は雪のため全線を通じて50キロ規制になっている。

以上のもののほかに、村田（1993）、花崗（2004）のような研究も見られる。村田（1993）は、「Nを通じて」と「Nを通して」の用例合わせて112例を基に、両者の用法の相違点と類似点を考察している。花崗（2004）は「Nを通じて」と「Nを通して」の意味、形態論的・構文論的・文体的な違いについて考察している。前接する名詞Nに焦点を絞り、計量的に使用傾向から両者の異同点を考察する本稿とは違う手法を取った研究である。紙幅の関係で、ここで概観しないことにする。

先行研究を概観すると、大まかに言えば、両者は「仲立ち／媒介／手段／

経路」「時間・期間・区間（地理的一貫性）」の用法に分かれて議論されていると言えよう。また、両者は書き言葉的であるとまとめられる。

一方、先行研究における両者の違いについての記述を見ると、以下のよう
にまとめられる。

「仲立ち／媒介／手段／経路」を表す用法を見ると、両者の使用範囲の違い、意味の違いについて言及している。ツウジテの経路は〈不可欠のもの〉で、トオシテの経路は〈直接の経路に代わるもの〉であったり（国広：1977）、「を通じて」の使用範囲のほうが多少狭いようであったり（森田・松木：1989）、「A + 通じて + B」は「内緒／内輪／内密／秘密裏／裏やコネを使った／おっぴらにできない／隠しておきたい」という話し手の気分が反映される場合に多用される（泉原：2007）という指摘があったりする。

「時間・期間・区間（地理的一貫性）」を表す用法を見ると、庵（他）（2001）泉原（2007）を除くと、「を通して」について「区間（地理的一貫性）」を表す用法の言及はなく、庵（他）（2001）でも、「を通して」もほぼ同じ意味で用いられると言及することにとどまっている。「時間・期間」を表す用法では、両者は、ある期間途切れることなくずっと継続するという用法で一致している。一方、「を通して」については、グループ・ジャマシー（1998）は「期間中に断続的の生じる出来事などを表す」と、「を通じて」にない用法を述べている。

本稿は、まず第3章で得られた事例の使用傾向、前接名詞 N の語種などを手掛かりに、「N を通して」と「N を通じて」両方とも書き言葉的であるが、そのうち、「N を通じて」がより書き言葉的であることを実証的に見る。次に、第4章で、両者の前接名詞 N の意味特徴、N の出現数を手掛かりに、両者の相違点を考察する。第5章でまとめる。本稿は主にコーパスから得られたデータの量的傾向を基に分析を進め、質的解釈も試みるが、必ずしも十分とは言えない。

3 用例収集資料と調査方法、使用傾向

3-1 用例収集資料、調査方法、用例数

用例収集資料：「現代日本語書き言葉均衡コーパス」（以下 BCCWJ と呼ぶ）を使用した。BCCWJ は短単位語数が約 1 億 490 万語で、今回これらすべて

を検索対象とした。また、補助資料として名大会話コーパス（約100時間）と『女性のことば・職場編』（552分）・『男性のことば・職場編』（728分）も使用した。

調査方法:BCCWJを対象に、「中納言」を利用して、「短単位検索」を行った。語彙素を「通す」「通ずる」に指定し、キーを「名詞」に指定することにより、「Nを（通し/とおし/透し/とほし）て」、「Nを（通じ/つうじ）て」をすべて検索した。各サブコーパスの割合及びヒットした用例数は表1の通りである。

BCCWJは13のサブコーパスからなっているが、本稿では、「出版・書籍」「図書館・書籍」「特定目的・ベストセラー」を同じ「書籍」とみなして一つにまとめた。したがって、表1のように、本稿では、11のサブコーパスをレジスターとして、考察対象の出現頻度を見る。なお、本稿では前接名詞Nを「を通して」「を通じて」の直前に位置する語とする。

表1 各サブコーパス語数%、「Nを通して」「Nを通じて」の用例数、%

	書籍	雑誌	新聞	ブログ	教科書	広報誌	国会 会議録	知恵袋	白書	法律	韻文	合計
語数%	60.3	4.0	1.0	9.6	0.9	3.6	4.9	9.7	4.5	1.0	0.2	100.0
Nを通して	3286	187	49	175	86	307	73	159	93	0	1	4416
%	74.4	4.2	1.1	4.0	0.0	1.9	7.0	1.7	3.6	0.0	0.0	100.0
Nを通じて	3021	119	87	188	60	279	326	61	852	22	0	5015
%	60.2	2.4	1.7	3.7	1.2	5.6	6.5	1.2	17.0	0.4	0.0	100.0

上記のような条件指定で検索した結果、「Nを通して」は4416例⁴で、Nの異なり語数は1613個だった。「Nを通じて」は5015例⁵で、Nの異なり語

4 【Nを通して】の検索条件式：

キー：品詞 LIKE „名詞% “ AND 後方共起：（語彙素読み = „ヲ “ AND 品詞 LIKE „助詞 - 格助詞% “） ON 1 WORDS FROM キー AND 後方共起：語彙素 = „通す “ ON 2 WORDS FROM キー AND 後方共起：（語彙素読み = „テ “ AND 品詞 LIKE „助詞 - 接続助詞% “） ON 3 WORDS FROM キー WITH OPTIONS unit= “1 “ AND tglWords= “20” AND limitToSelfSentence= “1” AND endOfLine= “CRLF” AND tglKugiri= “|” AND encoding= “UTF-8” AND tglFixVariable= “2”

5 【Nを通じて】の検索条件式

キー：品詞 LIKE „名詞% “ AND 後方共起：（語彙素読み = „ヲ “ AND 品詞 LIKE „助詞 - 格助詞% “） ON 1 WORDS FROM キー AND 後方共起：語彙素 = „通ずる “ ON 2 WORDS FROM キー AND 後方共起：（語彙素読み = „テ “ AND 品詞 LIKE „助詞 - 接続助詞% “） ON 3 WORDS FROM キー WITH OPTIONS unit= “1 “ AND tglWords= “20” AND limitToSelfSentence= “1” AND endOfLine= “CRLF” AND tglKugiri= “|” AND encoding= “UTF-8” AND tglFixVariable= “2”

数は 1655 個だった。「N を通して」と「N を通じて」両者に共通する N の異なり語数は 601 個で、例文数は「N を通して」は 2564 例で、「N を通じて」は 2903 例である。

N が 5 回以上出現したものに限定すると、「N を通して」は 2333 例で、N の異なり語数は 147 個だった。「N を通じて」は 2933 例で、N の異なり語数は 190 個だった。両者に共通する N は 79 個で、それぞれ 1477 例、1985 例であった。用例数等を表 2 に示す。なお、本稿では、前接する名詞 N の使用傾向を基に、両者の違いを探るため、N が 5 回以上出現した用例を分析対象とした。5 回以上に限定したのは用例の扱いやすさも考慮に入れ、恣意的に設定したもので、理論的根拠は特にない。

表 2 ヒットした用例数、N の異なり語数、両者共通の N

	全用例				N ≥ 5 回			
	例数	N の異なり語数	両者共通 N の例数	両者共通 N の異なり語数	例数	N の異なり語数	両者共通 N の例数	両者共通 N の異なり語数
N を通して	4416	1613 個	2564	601 個	2333	147 個	1477	79 個
N を通じて	5015	1655 個	2903		2933	190 個	1985	

表 1 から分かるように、各サブコーパスの総語数の割合が違い、検索して得た用例数及び%を単純に比較するのは望ましくないため、本稿では各サブコーパスの語数を同一の 100 万語に仮定した時の出現頻度を比較することにする。この 100 万語あたりの調整頻度 (per million words : PMW) を見るのは言語研究でよく使われる手法である。

図 1 に示しているように、100 万語あたりの調整頻度 (PMW) は、「N を通じて」は 48.3 例で、「N を通して」は 42.5 例で、「N を通じて」のほうがやや多いが、大きな違いは見られない。しかし、サブコーパス別に見ると、出現数の偏りが見られた。まず、「N を通じて」の用例が多いのは「白書」「新聞」「広報誌」「教科書」「国会会議録」である。この 5 つのサブコーパスはどちらかという、より書き言葉的であると言える。法律は「N を通して」が 0 例であるのに対し、「N を通じて」の出現頻度が 20.4 例である。法律は書き言葉的で、漢語を多用すると思われる。以上の用例出現割合は、「N を通じて」が書き言葉的であることを裏付けていると言える。

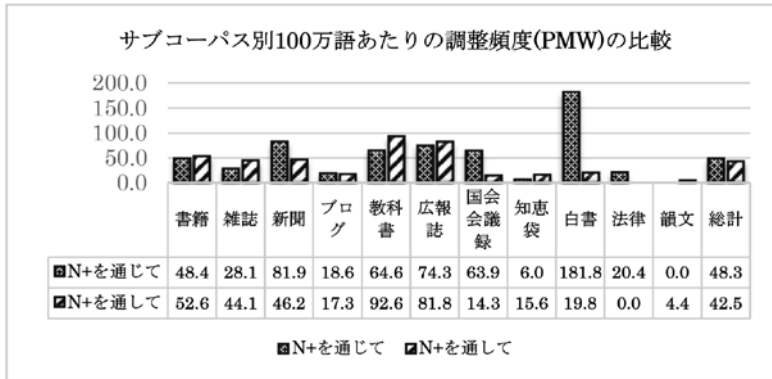


図1 サブコーパス別 100 万語あたりの調整頻度

一方、「Nを通して」の出現数が多いのは「教科書」「広報誌」「書籍」である。これらのサブコーパスも話し言葉というより、書き言葉的な要素が強い。もちろん、特に書籍には地の文のほかに、会話文も含まれ、話し言葉的要素も入っているため、一概に書き言葉的あるいは話し言葉的とは言えない。

「Nを通じて」「Nを通して」両方に出現頻度が低いのは「ブログ」「知恵袋」であった。知恵袋、ブログは出版される印刷物とは異なり、一般の人が自由に書き込んでおり、「書き手と読み手という相互交渉の場という意味で「会話」の一種とみなすことができる。(秋月 2007)」という特徴を持っている。これらの書かれた発話、会話的要素の強いサブコーパスには両者の出現頻度が低いことになる。言い換えれば、「Nを通じて」「Nを通して」両方とも話し言葉より、書き言葉的文書に現れやすい傾向にあると言える。図1の「韻文」において、「Nを通して」の調整頻度が4.4例となっているが、実例は一例のみであり、注6のように、沼べりの光が窓を通すという他動詞「通す」の原義を表す用法であり、「通じて」に置き換えられないものである⁶。

「Nを通じて」「Nを通して」の話し言葉における出現頻度を見るために、名大会話コーパス⁷（約100時間）と『女性のことば・職場編』（552分）・『男

6 今ここで主に回を語らう。回の断片を。さうして出来得れば、回を通してうつつら光る沼べりを。うつつら照りかへすわれわれの人生を。(鶴岡善久『モダニズム詩集』)

7 10代～90代の母語話者199人(女性162人、男性37人)による約100時間分の雑談(2名～4名の会話)を文字化したコーパスである。

性のことば・職場編』(728分)⁸を調べた。BCCWJにおける出現形式を基に、それぞれ「を通じて、をつうじて」「を通して、を通して、を透して、をとほして」を検索文字列とし、検索を行った。その出現例数をそれぞれ「Nを通して」「Nを通じて」にまとめて、表3に示す。

表3 母語話者話し言葉コーパスにおける出現頻度

	名大会話コーパス	女性のことば・職場編+ 男性のことば・職場編
Nを通して	1	4
Nを通じて	1	0
形態素数(延べ語数)	1,503,983 ⁹	299,664

表3に示す通り、話し言葉では、「Nを通じて」「Nを通して」両方とも使用例が少ないことが分かる¹⁰。

3-2 語種

一般的に書き言葉には漢語が使われやすく、話し言葉には和語の出現率が高くなると言われる。文体とサブコーパス(ジャンル)の関係を見るため、BCCWJ各サブコーパスの語種の出現数(100万語あたりの調整頻度で示す)を図2¹¹に示す。図2から、全体的に和語の出現数が多く、「広報紙」「白書」「法律」「新聞」には漢語の出現数が相対的に多いことが分かる。また、「書籍」「ブログ」「知恵袋」「韻文」の順に漢語の出現数が少なくなることがうかがえる。

現代日本語において、助詞、助動詞、接続詞などは和語が多く、種類が少

8 有職の20代から50代の女性・男性を対象に、各世代およそ5名、合わせて女性19名、男性21名による、職場でのインフォーマルな場面とフォーマルな場面での自然会話を録音し、それを文字化したものである。両者の発話時間(552分+728分)を合わせると21時間あまりである。

9 MeCab0.996(UniDic2.12)で形態素解析した。名大会話コーパスの形態素数(延べ語数)が1,953,248語であったが、それに参加者情報(年齢、出身地、在住地域、コード番号)も含まれていたため、実際の会話の延べ語数はこれより少ないことになる。ここで示している「1,503,983語」は森(2014)「可能を表す「見える」「見られる」の用法別使用傾向一コーパスに見る母語話者と非母語話者の使用の異なり」より援用したものである。

10 両者の出現率は話題内容に左右されることもあるが、239人による延べ121時間以上の発話の中で上記の例しか見られないことは、話し言葉ではあまり使われなと言えよう。

11 BCCWJの「語種構成表」を基に計算した。なお、グラフには語種「記号」を削除してある。
http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/freq-list.htmlより(2014年9月25日にアクセス)

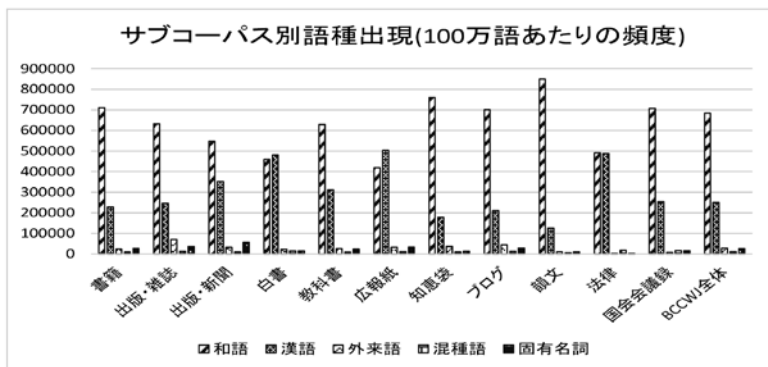


図2 BCCWJサブコーパス別の語種出現数 (PMW)

ない割に、くりかえし使われるため、文章が長くなるほど、和語の割合が高くなる。そのため、図2において、全体的に和語の出現率が高くなっていると思われる。

表4 前接名詞Nの語種分布

	Nを通して		Nを通じて	
	Nの個数	割合	Nの個数	割合
和語	1240	28.1%	596	11.9%
漢語	2510	56.8%	3595	71.7%
外来語	535	12.1%	604	12.0%
混種語	36	0.8%	29	0.6%
固有語	88	2.0%	161	3.2%
総計	4416	100.0%	5015	100.0%

表4は収集した用例全体のNの語種分布を示している。前接名詞Nの漢語の割合は「を通して」は56.8%で、「を通じて」は71.7%で、両者とも漢語との共起割合が高い。一方、和語の割合は「を通して」は28.1%で、「を通じて」は11.9%であった。「を通じて」は「を通して」より漢語との共起率が高いことが分かる。

サブコーパス別の出現率(表1、図1)、各サブコーパスの語種の割合(図

2)、及び全用例のNの語種分布(表4)、話し言葉コーパスにおける出現率(表3)から、「Nを通じて」「Nを通して」両方とも書き言葉的で、そのうち、「Nを通じて」が「Nを通して」よりも書き言葉的であることが分かる。このことは、先行研究における指摘を実証的に検証できた。

4 前接名詞の意味的分布

『分類語彙表』¹²⁾の意味分類を使って、「Nを通して」と「Nを通じて」における前接名詞Nの意味的分布を分析する。『分類語彙表』にない語句はもっとも適切な意味番号を付与する。Nが多義語の場合、できるだけその文脈に合った意味分類をする。

4-1 「を通して」だけに前接する名詞

3章で示したように、「Nを通して」におけるNの出現頻度が5回以上のものは147個で、2333例であった。この147個の名詞の意味分類は91種類で、そのうち、「Nを通じて」にはなく、「Nを通して」だけの意味分類は35種類、Nの異なり語数は45個、用例数は677例であった。表5は「を通して」だけに前接する名詞Nの意味分類及び名詞を示したものである。

表5 「を通して」だけに前接する名詞Nの意味分類及び名詞【部門ごと】

部門	中項目	Nの分類番号	Nの意味分類	Nの具体例	出現数
自然物及び自然現象	自然	1.5010	光	映像(9)、	9
	身体	1.5601	頭・目鼻・顔	目(246)、眼(25)、口(18)、	289
		1.5603	手足・指	腕(5)、手(5)、	10
		1.5604	膜・筋・神経・内臓	胎盤(6)、	6
		1.5605	皮・毛髪・羽毛	皮膚(6)、	6
	物質	1.5120	空気	空気(8)、	8
		1.5151	風	風(7)、	7
		1.5161	火	火(47)、	47
人間の主体活動	家族	1.2130	子・子孫	子ども(6)、	6
	人間	1.2020	自他	自分(5)、	5
	成員	1.2410	専門的・技術的職業	通訳(7)、	7

12 国立国語研究所(2004)『分類語彙表一増補改訂版』大日本図書

人間活動 精神及び行為	言語	1.3100	言語活動	主張 (6)、	6
		1.3151	書き	記録 (5)、	5
	行為	1.3410	身の上	独身 (8)、	8
	心	1.3001	感覚	五感 (5)、感覚 (11)、	16
		1.3020	好悪・愛憎	鑑賞 (6)、	6
		1.3070	意味・問題・趣旨など	問題 (7)、	7
	心	1.3071	論理・証明・偽り・誤り・訂正	筋 (17)、	17
	生活	1.3331	食生活	食 (7)、食事 (5)、	12
1.3371		旅・行楽	旅 (6)、	6	
待遇	1.3611	裁判	裁判 (7)、	7	
生産物及び用具	衣料	1.4200	衣料・綿・革・糸	糸 (10)、	10
		1.4240	そで・襟・身ごろ・ポケットなど	袖 (11)、	11
	機械	1.4610	鏡・レンズ・カメラ	カメラ (7)、レンズ (28)、眼鏡 (5)、フィルター (20)、	60
	資材	1.4120	木・石・金	ガラス (14)、	14
		1.4160	コード・縄・綱など	ワイヤー (5)、紐 (5)、	10
	住居	1.4440	屋根・柱・壁・窓・天井など	壁 (8)、窓 (17)、	25
	食料	1.4300	食料	食べ物 (5)、	5
抽象的關係	空間	1.1741	上下	下 (5)、	5
		1.1750	面・側・表裏	画面 (6)、	6
	形	1.1800	形・型・姿・構え	姿 (10)、	10
		1.1830	穴・口	穴 (13)、	13
	時間	1.1635	朝晩	闇 (5)、	5
	様相	1.1300	様相・情勢	状況 (6)、	6
量	1.1951	群・組・対	シリーズ (7)、	7	
合計				677	

表5から、「Nを通して」だけに前接する名詞には和語が多いことが分かる。前接名詞Nの異なり語数45個中、2字漢語サ変可能名詞は「通訳、主張、記録、鑑賞、食事、裁判」の6個だけであった。Nの具体例を見ると、「腕、手、糸、ワイヤー、紐」のような名詞は「移動されるもの」で、「火」も熱を通させる意味で「移動されるもの」になる。一方、「胎盤、皮膚、口、袖、レンズ、ガラス、フィルター、下、穴」などの名詞は「通過場所＝経路」を表すものである。「筋」に関しては、「筋を通す」という慣用句になっている。これら

の名詞が前接する「を通して」は他動詞「通す」の原義を保持しており、「を通じて」に置き換えられない。

「人間活動主体」には「子供、自分、通訳」のような特定の人間を指している名詞になっている。また、「人間活動—精神及び行為」は「Nを通して」に比べれば「私的な活動、感覚」を表す名詞が多いことが分かる。よって、「Nを通して」は4-2で見る「Nを通して」に比べ、どちらかという私的な、具体的な事柄について述べる傾向にあると言える。

また、「映像、目、眼」は視覚に関わる名詞で、「を通して」のみと共起していることから、国広(1977:128)が述べている「トオシテは視覚に使えるが、ツウジテは使うことができない」ことを裏付けている。

4-2 「を通して」だけに前接する名詞

3章で示したように、「Nを通して」におけるNの出現頻度が5回以上のものは190個、2933例であった。190個の名詞の意味分類は103種類で、そのうち、「Nを通して」にはなく、「Nを通して」だけの意味分類は47種類、Nの異なり語数は62個、用例数は493例であった。表6は「Nを通して」だけに前接する名詞の意味分類及び名詞を示している。

表6 「を通して」だけに前接する名詞Nの意味分類及び名詞【部門ごと】

部門	中項目	Nの分類番号	Nの意味分類	Nの具体例	出現数
自然現象	自然	1.5030	音	音(7)、	7
		1.5210	天体	衛星(7)、	7
	天地	1.5250	川・湖	川(5)、	5
人間活動の主体	機関	1.2710	政府機関	政府(5)、	5
		1.2720	公共機関	JICA(6)、	6
		1.2750	国際機構	国連(6)、	6
	公私	1.2540	都会・田舎	地方(14)、	14
		1.2550	政治的区画	県(7)、	7
	社会	1.2620	現場	窓口(7)、	7
		1.2630	社寺・学校	学校(19)、大学(8)、	27
	成員	1.2411	管理的・書記的職業	大臣(5)、	5
		1.2412	実業・商業	業者(11)、	11
	精神及び行為	経済	1.3710	経済・収支	投資(8)、予算(5)、
1.3760			取引	取引(6)、貿易(6)、	12
1.3770			授受	提供(9)、	9

人間活動―精神及び行為	言語	1.3133	会議・論議	議論 (13)、会議 (7)、 会談 (6)、協議 (12)、 審議 (8)、話し合い (8)、	54
		1.3135	批評・弁解	評価 (6)、批判 (7)、	13
		1.3161	目録・暦	番組 (5)、	5
	交わり	1.3541	奉仕	サービス (5)、	5
		1.3542	競争	競争 (18)、試合 (5)、	23
		1.3551	戦争	戦争 (10)、	10
	事業	1.3801	生産・産業	開発 (9)、	9
		1.3833	興行	開催 (8)、	8
		1.3850	技術・設備・修理	整備 (10)、	10
		1.3852	扱い・操作・使用	利用 (9)、	9
	心	1.3040	信念・努力・忍耐	努力 (10)、	10
		1.3061	思考・意見・疑い	検討 (9)、	9
		1.3081	方法	手段 (12)、	12
		1.3082	制度・慣例	制度 (17)、	17
	待遇	1.3600	支配・政治	改革 (8)、	8
		1.3620	運営	運営 (5)、管理 (5)、	10
		1.3630	人事	選挙 (12)、	12
		1.3650	救護・救援	ODA (5)、援助 (7)、	12
		1.3682	賞罰	促進 (7)、	7
抽象的関係	作用	1.1510	動き	運転 (6)、	6
		1.1523	巡回	サイクル (6)、	6
		1.1550	合体・出会い・集合など	結合 (5)、	5
		1.1560	接近・接触・隔離	接触 (9)、	9
		1.1581	伸縮	拡大 (15)、	15
		1.1583	進歩・衰退	強化 (7)、向上 (5)、 低下 (5)、	17
	事柄	1.1040	本体・代理	他 (7)、	7
	時間	1.1600	時間	時間 (5)、	5
		1.1650	順序	前半 (6)、	6
		1.1670	時間的前後	前後 (10)、	10
	存在	1.1220	成立	形成 (6)、	6
		類	1.1112	因果	影響 (6)、効果 (5)、
1.1131	連絡・所属		連鎖 (6)、	6	
合計				493	

表6から、「Nを通じて」だけに前接する名詞には「投資、開催、整備、検討」などのように、2字漢語サ変可能名詞が62個中36個で、「Nを通して」(45

個中6個)」より多いことが分かる。和語に比べ、漢語は書き言葉の文章により多く現れる。ここからも「Nを通じて」は「Nを通して」より書き言葉的であることが伺える。また、Nの意味分類を見ると、「人間活動主体」は「Nを通して」と違い、「政府、JICA、国連、県、学校、大臣、業者」のように公的組織・機関（の擬人化）を指しており、また、「人間活動—精神及び行為」は「投資、貿易、審議、評価、改革」のような、「公的な活動」を表す名詞が多いことが分かる。よって、「Nを通じて」は4-1で見た「Nを通して」に比べれば、どちらかという公的な活動について述べる傾向にあると言える。また、「Nを通して」に比べれば、「Nを通じて」の前接名詞「投資、取引、議論、戦争、開催、努力、検討、管理、援助、促進」などは、動作・行為を表して、動作過程を含むことが分かる。「Nを通して」にも「通訳、鑑賞、食事、裁判」のような動作プロセスを含む動的名詞の用例があるが、用例数も、Nの種類（異なり語数）も「Nを通じて」ほど多くない。

それから、視覚に関わる名詞は「を通じて」とは共起しないが、「音を通じて」のように、聴覚に関わる名詞が前に来ることがある。

- (1) 息子は音を通じて世界の色々な音楽家とつながる。

(大江健三郎『同じ年に生まれて』)

4-3 「を通じて」と「を通して」両方に前接する名詞

Nが5回以上出現した用例の中で、「Nを通じて」と「Nを通して」両者に共通するNは79語あった。詳細は以下の通りである。また、「Nを通じて」と「Nを通して」の用例数はそれぞれ1985例、1477例である。

インターネット、こと、コミュニケーション、スポーツ、テレビ、ネットワーク、ふれあい、ブログ、プロセス、マスコミ、メディア、もの、ラジオ、ルート、一生、運動、音楽、過程、会、会社、会話、絵、学習、活動、管、関係、期、期間、機会、機関、教育、局、訓練、経験、研究、言葉、交換、交渉、交流、行為、行動、作業、作品、作用、参加、仕事、四季、市場、指導、事業、事件、事例、時代、実験、実践、取り組み、取材、手、人、世界、世紀、生涯、生活、全体、全編、組織、体、体験、対話、代、調査、電話、日、年、年間、分析、本、遊び、歴史

両者に共通する前接名詞 79 語中、出現回数の開きが 5 回以上のものは 43 語あった。それを図 3 に示す。

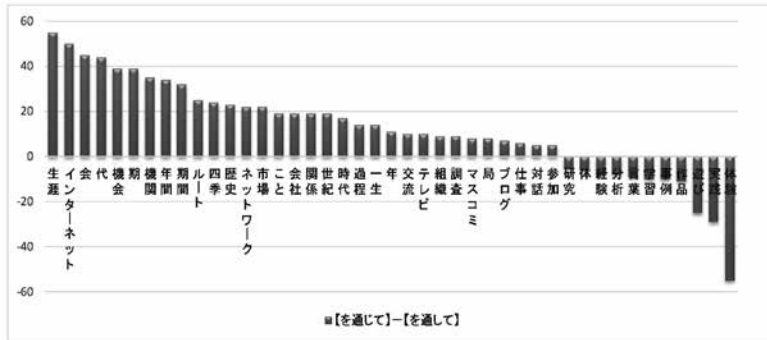


図 3 「Nを通じて」と「Nを通して」に共通するNの比較
(出現頻度の開き \geq 5回)

図 3 が示すように、「Nを通じて」が多いものは「生涯～参加」の 32 語で、「Nを通して」が多い項目は「体験～研究」の 11 語である。「Nを通じて」の前接名詞 N は「インターネット、ルート、ネットワーク、テレビ、マスコミ、ブログ」など、情報伝達の媒体を意味するもの、「生涯、期、年間、期間、四季、歴史、世紀、時代、一生、年」など期間を意味するものが多いことが分かる。また、「Nを通じて」は「会、機関、会社、局」のように、4-2 でも触れたとおり、公的組織・機関を表す名詞が多い。

一方、「Nを通して」の前接名詞 N は「体験、実践、遊び、作品、事例、学習、分析、経験」などが多く現れ、動作主体による積極的な持続行為により、何かを実現し、あるいは得ることを表していることが分かる。これも 4-1 で見た、私的な、具体的な事柄について述べるものに通じていると思われる。

「インターネット、ルート、ネットワーク、テレビ、マスコミ、ブログ」などの情報伝達媒体は「を通じて」との共起が「を通して」より多いということは、国広 (1977) で指摘された「ツウジテの経路は〈不可欠のもの〉である。(中略) ツウジテの経路の方が (出来事に対して演ずる役割、) 係わりが深い」ことを裏付けていると言える。

以下、具体例を挙げて、述語部分との意味的係わりに注目して、両者の関

係を見てみる。

- (2) e - T a x (国税電子申告・納税システム) を使うと、インターネットを通じて、申告や納税ができます。詳細は e - T a x ホームページをご覧ください。(神奈川県川崎市中原区『市政だより(中原区版)』)
- (3) 無線やインターネットなどのネットワークを通じて配信される情報を「ネットワーク コンテンツ」という。(吉田耀子『エクステンディッドエンタープライズ』)
- (4) 会議はすべて公開とし、傍聴者は別途準備した別室でモニター・テレビを通じて傍聴していただきました。(国会会議録)

例(2)～(4)の「を通じて」は媒介としての係わりの深さに重点が置かれており、「を通して」に置き換えると、「申告する・納税する、配信される、傍聴する」ということに関心が行くように思われる。一方、下記の例(5)～(7)を見ると、いずれも「Nを通して」、その結果、どうなるかに関心が寄せられているように思われる。

- (5) マイクに向かって話し掛けるだけで相手に声が伝わり、インターネットを通して、生の会話が楽しめる。(著者不明『ADSL 導入・活用技全書』)
- (6) 主要な社会問題の多くは、学習サークルのネットワークを通して国民的な関心へと広がって行く。(馬橋憲男『NGO 先進国スウェーデン』)
- (7) 容疑者は、直接またはモニター・テレビを通して二十四時間監視されているということである。(カレル・ヴァン・ウォルフレン(著)/篠原勝(訳)『日本/権力構造の謎』)

先行研究では、時間、期間を表す場合、「を通じて」「を通して」には意味の差がほとんどなく、置き換えられるとしているが、「生涯、期、年間、期間、四季、歴史、世紀、時代、一生、年」など期間を意味するものは「を通じて」と共起する例が多く、それが意味するものは何かを検討してみたい。下記の例のように、「Nを通して」の前に「あらゆる、全」など範囲を表すものが

見られる。検証するために、Nの直前に現れる成分に「あらゆる、各種、各、等の、全」のような範囲を表すものが現れる例を絞った結果、「Nを通じて」は144例で、「全時代、全生涯、全時期、全期間、各年代、各世代、全歴史、全過程、あらゆる機会」などの例が多かったのに対し、「Nを通して」は19例のみだった。この使用例の頻度の差から「Nを通じて」は期間範囲を限定する意味のほうが「Nを通して」より強いことが分かる。下記の例におけるNはそれぞれ「指導取締りを実施する、高率で推移する、見出すことができる」ことに対し、設定された期間範囲であり、この設定された期間範囲内において、途切れることなく同じ事態が持続することを表している。

- (8) 関係法令の励行に重点を置き、船舶への立入検査を実施するなど、あらゆる機会を通じて現場における指導取締りを実施する。(「交通安全白書 平成11年版」)
- (9) 殺人の凶器使用率は、平成8年にわずかに低下したものの、全期間を通じて七十%台ないし八十%台の高率で推移している。(「犯罪白書 平成14年版」)
- (10) それは経験にもとづく批判であり、したがってそれを証明する証拠はゲーテの全生涯を通じて見出すことができるのです。(ゲオルク・ライ (著) / 嵯峨山あかね (訳) / 河井弘志 (訳)「司書の教養」)

一方、例(11)を見ると、「各時代」、という期間内に、何か事態変化がもたらされるのを述べていることが分かる。例(12)にいたっては、「全生涯」が見る対象で、「通して」は本動詞の意味で使われている。

- (11) 平安時代のかな文字の発展は、後の室町、安土桃山、江戸の各時代を通して、自然をテーマとした様々な芸能や工芸に洗練された。(福良宗弘「茶の湯の心理 もてなしの空間と心地よさ」)
- (12) 三十代の終わり頃から、彼は自分の全生涯を通して見ることができるようになっていた。あたかも彼が観客であり (S・クーンツ (著) / 高野裕美子 (訳)「大包囲網/上」)

このように、「生涯、期、年間、期間、四季、歴史、世紀、時代、一生、年」など期間を意味するものは「を通じて」と共起する例が多いのは、ある事態が途切れることなく持続する期間範囲を設定する「を通じて」の機能にマッチするためである。

次に、「区間（地理的一貫性）」を見るが、例（13）～（17）から、範囲全体にわたってという意味を表していると言えよう。「Nを通じて」と「Nを通して」両者において、違いが見られないようである。

- (13) 目に、真正の名義を確認できた上でなおかつ、それを各種の金融機関すべてを通じての総合名寄せというものを現実的にいかなる手段を講ずれば可能に…（『国会会議録』）
- (14) 村は、職員の任免、給与その他の身分取扱いに関しては、職員のすべてを通じて公正に処理しなければならないこととする（同条2項）。（宇賀克也『地方自治法概説』）
- (15) 特に重要な場所のシーン景観だけをデザインするのではなく、路線全体を通じて利用者がどのような景観体験をするかを勘案し、メリハリを…。（道路環境研究所『道路のデザイン』）
- (16) ただし、ヘッダー・フッターは通常の本文領域と違い、文書全体を通して共通の内容を入力するのが基本となります。（相澤裕介『Wordの掟』）
- (17) この法則は調査対象者の全体を通して見られる1つの傾向について述べたものである。（木村通治ほか著『ファセット理論と解析事例』）

5 終わりに

本稿は、BCCWJを使って、主として「を通じて」と「を通して」に前接する名詞Nの異同を手掛かりに、「Nを通じて」と「Nを通して」の違いを探った。その結果、以下のことが明らかになった。

第一、先行研究でも指摘されているように、傾向として、「Nを通じて」「Nを通して」の両方が書き言葉的ではあるが、「Nを通じて」がより書き言葉的であることが検証できた。

第二、「Nを通じて」は公的な活動について述べる傾向にあり、「Nを通して」はどちらかという私的な、具体的な事柄について述べる傾向にある。

第三、「Nを通じて」が情報伝達の媒体としての用例が多く、「Nを通じて」は媒体としての係わりの深さに重点が置かれており、それに対し、「Nを通して」は、「Nを通して」、その結果、どうなるかに関心が寄せられている。

第四、「Nを通して」は主体の積極的な持続行為により、何かを実現し、あるいは得ることを表す用例が多い。

第五、「Nを通じて」は期間を表す用例が多く、「Nを通じて」は期間範囲を限定する意味のほうが「Nを通して」より強く、設定された期間範囲内において、途切れることなく同じ事態が持続することを表している。それに対し、「Nを通して」は期間、過程を踏まえて、何か事態変化がもたらされるのを述べる傾向にある。

本稿は実例に基づいて、量的出現率に重点を置いて、先行研究を検証した。個々の用例、特に述語部分との係わりについての分析が不十分であり、したがって、泉原（2007）で指摘されている両者の違いについて検証できなかった。また、「通す」「通じる」の本動詞の用法を削除せずに分析した。先に削除したうえで見たほうが、両者の使用傾向の量的違いがもっと顕在化できたと思われる。両者の具体的な意味用法を、後続述語も考察範囲に入れて、用例を詳細に検討する必要もある。今後の課題としたい。

参考文献

- 秋月高太郎（2007）「ブログに書かれること、書かれないこと—ブログ「会話」の含意—」、『日本語学 特集ブログのことば』、26：4、pp.46-56。
- 庵功雄、高梨志乃、中西久美子、山田敏弘（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』、スリーエーネットワーク。
- 泉原省二（2007）『日本語類義表現使い分け辞典』、研究社。
- グループ・ジャマシイ（1998）『教師と学習者のための日本語文型辞典』、くろしお出版。
- 現代日本語研究会（編）（2011）『合本 女性のことば・男性のことば（職場編）』、ひつじ書房
- 国広哲弥（1977）「トオル・トオス・ツウジル」、柴田武（編）（1979）『ことばの意味：辞書に書いてないこと』、pp.1-32、平凡社選書。
- 国立国語研究所（2004）『分類語彙表—増補改訂版』、大日本図書。
- 花蘭悟（2004）「『Nを通して』と『Nを通じて』」、『留学生日本語教育センター論集』、

- 30、pp.17-31、東京外国語大学。
- 村田年（1993）「中・上級表現文型研究『…を通して /…を通じて』」、『日本語と日本語教育』、22、 pp.1-32、慶応義塾大学。
- 森敦子（2014）「可能を表す「見える」「見られる」の用法別使用傾向—コーパスに見る母語話者と非母語話者の使用の異なり」『日本語・日本語教育研究』、5、pp.75 -90、ココ出版。
- 森田良行、松木正恵（1989）『日本語表現分型：用例中心・複合辞の意味と用法』、アルク。

用例出典及び検索ツール

- 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）（2011） 国立国語研究所
短単位検索 Web アプリケーション「中納言」 URL: <https://chunagon.ninjal.ac.jp/search>
- 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』 語種構成表 ver.1.0 国立国語研究所 http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/freq-list.html (2014年9月25日アクセス)
- 形態素解析処理は形態素解析器「MeCab」、解析用辞書「UniDic」を使用している。
- 『名大会話コーパス』 <https://dbms.ninjal.ac.jp/nknet/ndata/nuc/>